

愛犬を守るために私たちができること

家族の一員である愛犬には、いつでも元気にそばにいて欲しいですね。そのために、飼い主である私たちがしてあげなくてはいけないことがたくさんあります。私たち人間とは種族の異なる愛犬。健康管理の正しい知識を身に着け、日常の気配りをしてあげながら愛犬と一緒に、健やかに楽しい暮らしを送っていきましょう。

ワクチンの知識①

わんちゃんは、年に1回ワクチンによる予防注射をします。これは、危険性が高い幾つかの感染症の予防注射になります。

3種混合・5種混合など、幾つかのワクチンを混合型でするものから、特定の1種類のみワクチンまで様々ありますが、どれも重症化しやすいものや死亡率の高い感染症に対するものとなります。

私たち人間も、毎年インフルエンザなどの流行に備え、子どもやお年寄りも優先で、またその他の方も予防接種を希望したりします。但し、予防接種をしておけば絶対その病気に罹らないかと言えば、その保証はありません。けれども、その病気に罹りにくくなりますし、万が一罹ってしまった時も、命の危険などには及ばない軽症で済む可能性が高くなります。

現在はワクチン接種の普及が進み、怖い伝染病のひとつ、犬ジステンパーなどが大流行することは無くなりました。そのような目に見えた恐怖が減ったこと、室内飼いでほとんどお外へは出さない、小型犬の体力が心配……

などの理由からか、最近はこのワクチン接種をしなかったり、2～3年に1回、という飼い主さんも見受けられます。

これらのワクチンで犬は終生抗体を作ることは出来ません。私たち人間は、幼い頃などに予防接種をすると、その時作られた抗体が、ほぼ一生に渡って活躍してくれるものもあります。しかし上記に挙げたワクチンによる犬の抗体は、時間がたつと次第に効力が低下してしまいます。そこで、安全性を考えて、1年に1回ワクチン接種が行われています。

ぜひ、愛犬を怖い感染症から守るために、獣医さんと相談して、ワクチンを毎年1回接種するようにして下さい。



Mini Column

昭和初期にかの文豪が提唱した「愛犬家心得」

日本初のノーベル文学賞作家、そして「伊豆の踊り子」や「雪国」などの作品で知られる川端康成は、無類の犬好きでした。ワイヤー・フォックス・テリア、コリー、グレイハウンドなど飼っていて、昭和八年（1933年）には「愛犬家心得」というエッセイまでも発表しています。川端康成の提唱した愛犬家心得とは……。

- 一つ。血統書ばかりではなく、親犬の習性を良く調べた上で、子犬を買う。
- 一つ。放し飼いをしない。
- 一つ。犬を訓練所に入学させ、また、犬猫病院へ入院させるにも、預け先の犬の扱いをよく知っておく。
- 一つ。一時のきまぐれやたわむれ心から、犬を買ったり、もらったりしない。
- 一つ。数を少なく、質をよく、そして一人一犬を原則とする。
- 一つ。犬も家族の一員のもつて、犬の心の微妙な鋭敏さに親しむ。
- 一つ。犬に人間の模型を強いて求めず、大自然の命の現れとして愛する
- 一つ。純血種を飼う。
- 一つ。病気の治療法を学ぶよりも、犬の病気を予知することを覚える。
- 一つ。先ず、牝犬を飼って、その子どもを育ててみる。
- 一つ。犬を飼うというよりも、犬を育てるという心持をどこまでも失わない。

現在の状況には即さない部分もありますが、放し飼いが当たり前で、今とは犬に対する考え方が全く違う時代に、とても先駆的な考え方をしていたようです。

川端康成「愛犬家心得」は、『犬 クラフト・エヴィング商会』（中公文庫）で読むことができます。

「愛犬家住宅住まいづくり」のご相談先



愛犬家住宅
住まいづくり倶楽部